

「十字架のイエス」（ルカによる福音書二三章二六〜四三節）

1 キレネ人シモン

今日は受難節第五主日です。イエスの受難の歴史を、私どもはルカによる福音書によって追いながら、いよいよ、十字架の出来事の前に辿り着いたところです。まさに福音書のクライマックス（山場）です。一続きの記述は大きく四つの場面に分けられます。

最初は、十字架が立てられるゴルゴタの丘までイエスが進んで行くところです（二六〜三一節）、次に、十字架上のイエスです（三二〜四三節）。三つ目は、イエスの死です。そして最後に、四つ目、十字架から引き降ろされて、埋葬される場面です（五〇〜五六節）。

説教では、ここを二回に分けて、取り上げます。今日は、その最初の二つ、ゴルゴタへの歩みと十字架上のイエスです。十字架に向かうイエスの歩みは次のように始まります。

人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせイエスの後ろから運ばせた（二六節）。

「人々」とあるのは、一つ前の節（二五節）に、ピラトがイエスを「彼ら」に引き渡して好きなようにさせた、とありましたが、その「彼ら」です。具体的にはイエスをローマに訴え出たユダヤの指導者たち、そして民衆です。ピラトの決定を実行に移すローマの兵士たちも入っていました。イエスを十字架へと引いて行ったのは、その務めに当たった限られた人たちではありませんでした。ここでも大勢でイエスを連れて行ったのです。

向かった先、刑場は、エルサレムの北西の郊外、郊外といっても、都に近い（ヨハネ一九・二〇）ゴルゴタ（されこうべ）と呼ばれた丘でした。エルサレム市内から約一キロの道のりです。今でも「悲しみの道」として残っています。囚人はむち打られたあと、十字架を自ら運んで行かなければなりません。十字架の横棒をかついで行ったようです。

どのくらいの時間を要したか、分かりません。しかしこの間に起こったことについて、マタイ、マルコ、ルカは、イエスに代わってキレネ人シモンが十字架を背負って行ったことだけを記しています。

このキレネ人シモン、キレネというのは北アフリカのいまのリビアです。シモンはギリシャ風の名前ですが、キレネには多くのユダヤ人が住んでいて、会堂もあり、彼はその地出身のユダヤ人です。

ただ「田舎から出て来た」とあるので、前からパレスチナで生活していて、祭りで都に来たのでしょうか、昨日今日と都で起こったイエスに関することは何も知らなかったようです。裁判にも参加していなかった。たまたまそこを通りかかった。たたくさんの人がいて、前のほうに押し出されたのでしょうか。無理矢理担がされた（マルコ一五・二二）と他の福音書にはありません。イエスは、人間的には、担いでいくだ

けの力が残っていなかったのです。

こうした担当がされたシモンのことは、初代教会の人々の記憶にはつきり残ったに違いないありません。

十字架を背負ってイエスの後からついていくシモンに、ペトロをはじめとして、ついて行くことに失敗した弟子たちは、まことの弟子の姿を見てとらざるをえなかったからです(一五・二一、ローマ一六・一二)。その意味で、生前イエスが、くり返し、十字架を背負ってわたしに従ってきなさいと語られたことを、彼らも、決して忘れることはなかったのです(九・二三、一四・二七)。

2 周りの人びと

さてイエスの逮捕からはじまって、ここまでは、まるで何かに憑かれたかのようにイエスを、何としても殺し、排除しようとする人びとしか、福音書には出て来ていませんでした。

しかしここに来てようやく、イエスに同情し、それだけでなく、イエスをはつきりとメシアと信じる人々のことも、福音書は描きはじめます。キレネ人シモンもそこに入ってよいと思います。それを今日の箇所から拾えば、こうです。

民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った(二七節)。

民衆は立って見つめていた(三五節)。

民衆は、すべてがみな、いわば名もない群衆となつて、イエスを排斥しようとしたわけではありません。いま読んだ聖句は、来週の聖書箇所、四八節以下につながってきます。

見物に集まっていた群衆もみな、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。イエスを知っていたすべての人たちと、ガラヤから従って来た婦人たちは遠くに立って、これらのことを見ていた(四八〜四九節)。

こうした中で、これも来週の聖書箇所で、イエスの死を見守っていたローマの百人隊長の言葉は、決定的なものです。

百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って神を賛美した(四七節)。

こうした、いま挙げたような人が今日の箇所あたりから目立つようになります。しかしなお「闇が力を振るっている」(二二・五三)ことに変わりはありません。キレネ人シモンを捕らえ十字架を背負わせ、実際イエスを十字架につけ、イエスの服をくじを引いて分け合った「人々」(二六、三三、三四節)がそこにいます。イエスをあざ笑うユダヤの「議員たち」(三五節)、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱するローマの「兵士たち」(三六節)もいるのです。

そしてイエスと一緒に十字架にかけられた二人の犯罪人の一人も「自分を救え」と言ったそうした議員や兵士たちと同じであったのです。

十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」(三九節)。

これに対して、同じくイエスと一緒に十字架にかけられたもう一人の犯罪人は、イエスをののしったあの最初の犯罪人をたしなめ、自らの罪を認め、むしろイエスの無罪をはつきり述べ、イエスに自らの希望を託します。この人は、私どもが、はじめに挙げた、嘆き悲しむ婦人たち、同情をおしまなかつた民衆、そしてイエスを神の子と告白した、しかも最初に告白したあのローマの百人隊長たちと並ぶ人として受けとつてよいと思えます。

3 教会の根底にあるもの

そこで、十字架の出来事の二番目の場面、十字架上のイエスに目を向けることにしましょう。

ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた(三二一〜三三節)。

二人の犯罪人が、イエスと一緒に十字架につけられた事実は、四つの福音書がみな伝えていきます。

同じく四つの福音書とも、これら犯罪人の名前も、犯した罪も、何も伝えてはいません。十字架上の三人の、ここに伝えられているような会話を伝えているのはルカによる福音書だけです。

いずれにせよ彼らも、理由は違っていても、イエスと同じように捕らえられ、裁判にかけられ、死刑の宣告を受け、いまやイエスと一緒に十字架の上で死にさらされているのです。

二人の犯罪人は、こうして、イエスと同じく苦しみつつ、否応なしに、つまり望んだわけでもないのに、イエスとの自らは決して解消できない関わりの中に入っているのです。

一人の説教者が、ここに最初の確かな教会があると言っています。私はそれを読んだとき目からうろこが落ちたような思いになったことがあります。イエス・キリストがいますところ、そこに教会があります。なるほど、そこにも、教会がある。しかも確かな教会が。なぜ確かな教会かというと、あやふやな疑わしい教会もあるからだというのです。あやふやな教会は、イエスがペトロら弟子たちと築いてきた交わりであり、教会です。いまやその弟子たちは、イエスを捨てて、四散してしまつた。そこにもキリストの教会はあつた。しかしそれはまことに不確かなものだったといわなければならぬのです(バルト、バーゼル刑務所での説教、一九五七年)。

それに対して、ここにあるのは確かな教会です。犯罪人たちは、弟子たちのように眠りこけてしまうことも、イエスを否定して、そこから逃げ去ることもできないのです。どこまでもイエスと共にいます。それゆえ、そこには、確かな教会が生まれているのです。

しかしその確かさは、ただたんに、そのようにして犯罪人がイエスと一緒にいて動けないからだけではありません。イエスが彼らと共にいてくださるからです。イエスが共にいてくださるとは、彼も犯罪人の一人として数えられたということです。イエスが十字架の上であつて、二人の犯罪者と連帯しておられるからです。そこに教会の確かさの根拠があるのです。

他の福音書を見ると(マタイとマルコ)、二人の犯罪人は、二人ともイエスをののしっています。しかし、ルカではそうではありません。先に申し上げるように、一人はののしり、一人はイエスへの希望を表明しています。その人の言葉を、もう一度お読みします。

すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか。同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、このお方は何も悪いことをしていない」。そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はつきり言うておくれが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた(四〇〜四三節)。

この出来事は、これまで、一人の犯罪者の改心物語として、人は死の床でも改心できる、いわばその証明として読まれることもあつたところだ。犯罪人は罪を告白する、イエスは司祭のようにそれを聞き無罪宣言する。他方、そうしない方は救われないうことになりません。

しかし私どもが目注ぐべき本当に重要なことは、ここでイエスが犯罪人の一人に数えられ(イザヤ五三・一二、ルカ二二・三七)、二人の犯罪人と一つに結ばれていることです。犯罪人の罪はイエスによつて引き受けられます。イエスの命、神の命は犯罪人に与えられます。罪があがなわれます。たとえここでの一人の犯罪人のように人がイエスをののしり、離れようとしても、イエスは離れようとしません。人がどんなに神から離れても神は人から離れることはない。この神を、われらと共にいます神を、イエスは、二人の犯罪人の真中に、自らも犯罪人として十字架につけられて証しているのです。

地動説で有名なポーランドのコペルニクス(1473-1543)、彼はカトリックの司祭としてつとめたフロムボルクの大聖堂に葬られています。その石棺に次のような言葉が刻まれていると読んだことがあります(イーヴァント、黙想集)。「汝がパウロに与えた恵みではなく、汝がペトロに贈りたもうたあわれみでもなく、汝が十字架の上の犯罪人に示してくださった愛顧を、ただそれだけを私は欲しい」。この愛顧が、私どもの生の根底に、教会の根底にあるのです。

(二〇二一・三・二一)